



アマビエトラック



角大師二枚と右に豆大師

大師が二枚貼られていたので写真に撮った。この地域の角大師は黒目の部分がないというのを聞いた。角大師は栃木市のもの(旧岩舟町)だが、となりの豆大師は足利市のものだという。コロナへの意識の有無は未確認である。

三 コロナウイルスは中国の生物兵器説

生活の中で中国の生物兵器説が何度か出て来た。武漢で生物兵器として作ったのではないかと聞いたウイルスがもれてしまったのではないか、という言い方で、コロナが流行り始めたころに職場でも聞いた。

四 卒業式前後

三月八日、職員室で会計の仕事をしつつ、飾り馬の祭礼を見に行く。今年は参加者がほとんどいなかったという。

三月八日、職員室で会計の仕事

また、その頃のことです。日付はよくわからないが、うがいしても水を吐かずに飲めばよいのだと上司がいつていた。胃液でウイルスが死ぬとのこと。それならうがいせず物を食べてもよさそうなものだが、その人だけでなく結構広く言われている。この先生はマスクは紐が縫い付けてあるほうが外側だということも言っていた。池上彰がテレビで言っていたのだという。確かに紐が縫い付けてある方を外にした方が横から空気が漏れない。その日からマスクは紐を外にしてつけている。このころ学校では白以外のマスクも許可された。もともと風紀を乱すということで学校ではマスクは白であった。

五 お湯を飲めば大丈夫

二月二十四日、異類の会は実施された。「令和元年度日々の俗信・世間話報告 異類編」ということで私が発表した。この異類の会はいつでもブログに発表後の報告をするのである。

しかし、その時はコロナが流行っていたのでそれを記録せねばという思いがあり、ブログにもその日のことを書いたので引用する。^①

当日は早めに会場に着くと一人で座って作業をしていたのだが、楽器を抱えたグループが近くにきた。その中の若い兄ちゃんが「コロナウイルスって熱には弱いっほいね」と仲間語り始めるのが聞こえた。曰く、母親から朝に送られてきたし

を作るようになった。発酵食品がよいという話がどこかであったらしい。その後、納豆はいくらでも買えるようになってくる。今頃はもう十月になったが乳酸菌入りのキムチを買ってきている。菌を気にしているのは私の家族くらいの気もするが記録しておく。

七 素麺を食べれば大丈夫?

七夕で素麺を食べる日だと答える生徒がいた。私の勤務先の学校は自宅から車で十分以内の地域なのにそうした習俗があることを知らず衝撃を受けた。ただ、授業中に手をあげさせて確認すると、三十人くらいの学級で素麺を食べる人答えた生徒は二人であった。地元の人でも知らない。ネットで検索すると七夕に素麺を食べている写真をSNSにアップし、疫病退散などといった人が出て来たが、Web上以外ではコロナと結び付ける言説は確認できていない。

八 かわいい黄鮒に思いを寄せて

アマビエは瓦版に描かれた妖怪である。そして瓦版に描かれた妖怪の出没地と瓦版が流通した地域は別である。私の県にも似たようなのがあるという発言は学問上は慎重になるべきだ。一方で、ご当地キャラ化して楽しまれてもいる。山梨県立博物館の「ヨゲンノトリ」のように山梨での利用を推進する動きもある。^③

栃木でも黄鮒が少し話題になった。ここで前後関係を把握し

INEには、研究者の情報によるとお湯を飲むとコロナウイルスがその熱で死ぬということが書かれていたのだという。実は同様の言説をすでに発表者はFacebookで見えており、典型的な流言飛語と感じていた。それを異類の会参加者に伝えると、文面の中で温度を変え、広まっていることが今回の会の参加者からも知ることが出来た(二六度や二七度のお湯や、三六度のお湯などの説がある)が、こうした流言を目の当たりにしたのは驚いた。

ちなみに翌朝、家族にこのことを話すと、すでにテレビのニュースで注意喚起が促されていたという。この文章を書いている二月二十九日現在、検索するとデマを喚起する文面ばかりなのでほぼ終息した流言だろう。

正確にはその後も完璧に終息するにはタイムラグがあった模様。

六 納豆を食べれば大丈夫

納豆が売り切れて買えない。少し前にトイレトパーバーなどもなくなっていたが、品切れになりそうなもの買い占めが問題になっている。

三月二十五日の怪異怪談研究会で話題にすると、ある人は納豆で有名な茨城は感染者が出ていないからだという。菌が良いという発想があったかもしれない。我が家ではぬか床をこしらえ漬物

ておきたいが、コロナ以前から宇都宮では黄鮒が町のあちこちで見ることが出来た。ただ、二〇一六年ごろだったか宇都宮で育った、二十代の男性に黄鮒を聞くとしらないとのことだったのでそこまでの浸透はしていないのかもしれない。また、同じ県内でも宇都宮ではなく栃木市内では黄鮒を知る者は少なかつた。ところが今回のコロナによって何度か新聞記事になった。

六月六日の下野新聞社説「雷鳴抄」には、次のようにある。

民話は人々の間に語り継がれてきたもので、昔話や伝説なども含まれる。天然痘が大流行したときに宇都宮の田川で黄色のフナが釣れ、病人が食べると治癒したという「黄ぶな」もその一つ▼宇都宮市教育委員会発行の「宇都宮の民話」はさらに詳しい。食べることで病気の予防にもなったが、簡単に釣れるものではない。そこで張り子の黄ぶなを作って年の初めに軒下にするし、後に神棚に供えて無病息災を願ったとある▼成立については県立博物館の担当者は「史料に書かれたものがなくはつきりしない。ただ江戸時代から存在したとしても不思議ではない」と話す。伝承だけに起源をたどるのは難しいようだ▼張り子の顔は赤で、胴体は黄、胸びれと背びれ、尾びれは緑と黒で彩色され、ずんぐりとして愛嬌がある。かなり目立ち、仮に自然界に生息していたらすく捕まりそう▼赤には魔を払うといった意味があり、福島県の赤べこなどと同じ系譜という。新型コロナウイルスの感染拡大で、改めて脚光が当たっている。感染予防

策を発信するものの「黄ぶな運動」や特別ラベルの地ビール発売など枚挙にいとまがない(後略)

さらに、六月十四日は栃木県民の日であるが、この日の「下野新聞」には、漫画家ちばてつやによる黄鮒をもったキャラクターのイラストとコメントが寄せられている。「まだ7歳になっ ていなかったな。旧満州の奉天(現中国瀋陽市)から引き揚げる途中でかくまわれていた屋根裏でね、母から聞いた話の中に、「黄ぶな」があったんですよ。母は宇都宮の生まれだから、疫病から人々を救ったという伝説を知っていたんでしょ。」とのこととで、いつごろから伝わるものかよくわかっていない黄鮒の話は戦時中くらいにはあったものということがわかる。

また、就職活動で八月二十三日宇都宮駅に行く。そこではモニターにアマビエや黄鮒の映像が流れていた。また、駅弁の「黄ぶなカレー」が販売された。



アマビエと黄鮒がならんだイラストなどが次々表示



黄ぶなカレーが駅弁として新発売

そして、図書館や公民館などに地元の方の作った作品が飾られていることがあるが、そのモチーフとしてコロナ除けの黄鮒が見られるようになった。



栃木市大平南公民館 栃木市立大平南公民館【無病息災 コロナ怖いみんな気をつけようね】とある



栃木市立栃木図書館【黄鮒 コロナに負けるな】と書かれている

九 自殺の噂

真偽不明の噂を親戚から聴く。親戚は美容院で聞いたという。とある商業施設に大阪のライブハウスでコロナに感染した女性が勤務しており、自殺した。その女性にはコロナになったことでたくさん補償のお金が請求されたことが背景にあるのではないかとのこと。

また、群馬県の介護施設で最初にコロナになった人は自殺をしたとのこと。

どちらも本当かは怪しい話とのこと(実際には具体的な地名

が語られているが割愛。

十 「アマビエは疫病を退散させるとは言っていない」 つづつ言説

アマビエがこれだけ流行し、除災の効果を求められると多くの人がそれに言及する。たとえば加門七海は次のように述べる。

日本にはアマビエの他にも、似たようなことを告げて去る妖怪が何体かいる。けれど、選ばれたのはアマビエだ。やや醒めた意見を記すなら、その造形の奇妙さと微笑ましい稚拙さに求心力があったのだろう。絵心をそそると言い換えてもいい。だから、みんなが競って描いた。描くことで病を除けるというよりも、素材の共有でもたらされる一体感が楽しかったようにも見える(実のところ、アマビエは自分の姿を描いて見せると言うだけで、難を逃れるとは語っていない)。

前半の画題としてのアマビエという認識は、同意である。

しかし、後半の「実のところ、アマビエは自分の姿を描いて見せると言うだけで、難を逃れるとは語っていない」というのは現代的なものの方ではないだろうか。実際に難を逃れるとは言っていないのは確かであるが、同様の写し絵で難を逃れるという「神社姫」や先の「角大師」など絵を戸口に貼る習俗の類を思えば、病気をまぬがれると認識するのが自然だ。

多くの人が疫病除けとしてアマビエを書いているときに意外性を持った言説として面白いのであろう。常識とは違う「真実」に人は惹かれる。そして、結果的にこうした「実はアマビエはコロナを終息させるとは言っていない」というような言説自体がよくあるパターンになっている。

『みんなのアマビエ』という本を出した編集者も次のように語っている。

編集担当の大久保かおりさんに「アマビエ」の豆知識や意外な経済効果について伺いました。

★アマビエは「疫病退散のご利益がある」とは言っていない？！

(大久保さん)

疫病退散の妖怪(予言獣)は、アマビエの他にもいたみたいですよ。

3本足の猿のような「アマビコ」、半人半牛の「件(くだん)」…。

文献によると「アマビコ」の方が「アマビエ」より先に登場しているんです。

「アマビエ」などを研究している、福井県文書館の長野栄俊さんによると「アマビコ」の字を書き損じて「アマビエ」になったのではないかと？

という説もあるみたいですね。

思うのである。

という言説はまさにこうした話型といえる。

続いて畑中章宏の五月三十日にアップされた記事の「アマビエは「除災」を語っていない」という項である。

ここでアマビエについて整理しておく、この妖怪は江戸時代後期の弘化3年4月中旬(1846年5月上旬)に、肥後国(現・熊本県)に現れた。海中に毎夜光る物が出るので役人が行ってみると、アマビエはこう告げて、海中に入った。「私は海中に住むアマビエと申すものである。今年から6ヶ年のあいだ諸国は豊作になる。しかし病が流行するから、早々に私を写して人々に見せよ」そのようすが江戸まで伝えられ、瓦版に描かれた姿は、長い髪でくちばしを持ち、体には鱗、脚の先は三つに分かれている。つまりアマビエは、病の流行を「予言」していても、疫病から逃れられる「除災」はアピールしていないのだ。このため、アマビエ研究の第一人者である長野栄俊氏は、今回のアマビエブームには予言の要素が見られず、「護符」としての特徴だけが拡散したと分析。「それなら、その姿を見たものに『無病長寿』を約束し、諸国に広めることを訴えた『アマビコ』という妖怪の方がふさわしい」と指摘したのである。

今回はこの記事の是非は紙面に余裕がないので置いておくこ

「アマビコ」は「自分を書き写すと無病長寿のご利益がある」と言ったそうなんですが、実は「アマビエ」は、自分を描き写すようにとは言っているけど、「ご利益がある」とは、^{ママ}名言していないんですよ！

でも、アマビエの方が描きたくなる可愛い姿ですよ。

繰り返しになるが、ご利益があると明言していないというのは正しい。しかし、そこばかり取りざたされている感がある。

さらに妖怪に関するネット記事ライターとしての仕事が多い、山口敏太郎と畑中章宏の記事を見たい。

二〇二〇年三月二十二日 山口敏太郎の記事には「病魔退散か呪いか」という箇所があるので引用する。

アマビエの姿を見れば病気が治る、と言われていたが、アマビエは一言もそのような内容は言っていない。ただ一言、「流行り病にかかった者に私の姿を描いた絵を見せろ」と言っているだけなのだ。

もし、アマビエが山幸彦の子孫である我々現代人に恨みを持っているとしたら、^⑩絵を見せることで大きな災が起きる可能性がある。2020年の3月、突如巻き起こったアマビエ祭り。この祭りは病魔退散の儀式なのであるか。それとも壮大な呪いのプロジェクトなのであるか。筆者はいささか疑問に

とにする。そして畑中はさらに同記事で、柳田の物言う魚を引用し、「人語を話す魚の存在は、災害をもたらすものとして恐れられてきたのである。」と述べる。そして、「アマビエは「災難の象徴」である」と述べる(アマビエが魚なのかは不明だが)。ここではやはり他と同様に「アマビエは疫病を退散させるとは言っていない」という言説が描かれていることに注目したい。

この記事では引用元が明記されていないが、次のネット記事が元になっていると考えられる。二〇二〇年三月十一日公開の長野栄俊にインタビューした記事のようである。記事の内容は、

最後の流行からおよそ140年。

コロナならぬ新型コロナウイルスの流行に直面する私たちは、SNS上でアマビエの姿を見て、リツイートや二次創作によって拡散を続ける。

では、ご利益はあるのか？

じつは亜種であるアマビエは「早々に私の姿を写して人々に見せよ」とは告げるが、その御利益は明言していない。

一方、原種のアマビコの方は「私の姿を見る者は無病長寿、早々にこのことを全国に広めよ」と告げている。

SNSで見て、拡散すべきは「アマビエ」ではなく「アマビコ」の方かもしれない。

今回のSNS上でのアマビエ大流行からは、予言の要素が抜け落ちており、護符の面のみで拡散しているようだ。

くれてありがとね」と小さな女の子になって現れてくれたのは無いのか?と酔いの覚めた頭で思うのです。」と記している。瓦版にしか残っていなかった妖怪アマビエの現代の遭遇譚である。江戸時代に絵で描かれた、輸入道という妖怪に遭遇した事例などがあるが、そうしたことに近い。¹⁶⁾

十二 竹の花とコロナ

世間話研究会が zoom を使いリモートで行われた。その際に、竹に花が咲いたことがコロナと関連づけられているのを見たとき、世間話研究会会員の加藤秀雄氏に聞いた。私は全くそれまで知らなかったもので、SNSなどで接する情報に差があるのだと思う。もっと言えば、アマビエやお湯のような大規模なレベルで広まった噂ではないだろう。検索するといくつか見つかった。ここにコピー、ペーストしておく。二〇二〇年四月三十日の記事だ。

「竹の花が咲いていました！ 不吉の前兆と言われるけど…
新型コロナウイルスだったか!」(for「走る・登る・食べる」
(<https://or5.blog.fc2.com/blog-entry-948.html> 二〇二〇年八月二十三日閲覧)

竹に花が咲くという俗信はこれまでも記録されてきたものだ。¹⁷⁾

少し怪奇じみた言説に興味関心のある方が結び付けて記述をしているようだ。

異類編」(<http://mri.zoku-sei.com/> 二〇二〇年八月二十三日閲覧)

閲覧)

(2) ただし、栃木県で全く確認できないわけではない。田沼町旧野上村の調査では「七夕の朝、メズラエンゲンをとりに畑へ行くと、女なら美男が男なら美女が出るという。しかし敢えて行くと気は変になるという。また十時にさうめんを食べると風邪をひかないという。この日墓掃除をする。」とある。(國學院大學民俗学研究会編・発行『民俗探訪』四十一年度一九六七)

(3) 私的利用は自由、山梨県内の事業者は画像の使用料が免除とある。(http://www.museum.pref.yamanashi.jp/3rd_news/3rd_news_200410.html 二〇二〇年十一月一日閲覧)

(4) 加門七海『お呪い日和 その解説と実際』二〇二〇 KADOKAWA

(5) 「貼ることで難を逃れる異形のものには多数ある」ことは拙稿「くだん」が何を言っているかわからない件」伊藤慎吾編『妖怪・憑依・擬人化の文化史』二〇一六 笠間書院 にも触れた。メディアによって話の性質が変わることを指摘した。近年も活発な研究がなされ、常光徹「予言する妖怪」二〇二六

歴史民俗博物館振興会 や笹方政紀「護符信仰と人魚の効能」東アジア怪異学会編『怪異学の地平』二〇一九 臨川書店、榎村寛之「件(くだん)」の成立―近世の古代的言説「近世的神話」の中で―前掲「怪異学の地平」などが書かれている。(6) 漫画家やアーティストら多くの人のアマビエ作品を集めた『みんなのアマビエ』二〇二〇 扶桑社

十三 志村けん生きていた説

志村けんがコロナのため亡くなった。それからしばらくたつた八月十九日、今年はずでに自宅待機の分の授業実数を取り戻すため中学校の夏休みが終わっている。部活の時に、男子テニス部の中学一年生に志村けんは実は死んでない説というのを聞いた。

志村けんは実は生きていたのだが、死んだことになっておけばコロナの危険性が広く伝わり、皆が気を付けるというのである。生きていたために、志村けんの遺体を家族すら見ることはできなかったのだとも聞いていた(実際には遺体からのコロナ感染が危ぶまれたため火葬された)。ネットで得た情報だという。

関係はないが私が小学生の頃、おそらく一九九〇年代の終わりか二〇〇〇年代に志村けんは生きていたのに死亡説が流れていたことを思い出した。

おわりに

思いつくことを徒然なるままに書いた。今は十月が終わろうとしている。鬼滅の刃の映画が流行っている。コロナはまだ終息せず、これから冬を迎える。今後どうなるか分からないが、とりあえず、こゝまで。

注

(1) 異類の会 永島大輝「令和元年度日々の俗信・世間話報告

(7) 二〇二〇年五月十七日に上げられた記事。「アマビエは「疫病退散」とは言っていない? 「みんなのアマビエ」編集担当 大久保かおりさんに聞くアマビエ豆知識と経済効果」山形アナ・長谷部愛画伯の「アマビエ画」TBSラジオ <https://www.tbsradio.jp/483813> 二〇二〇年一〇月二十八日閲覧

(8) この両名は民俗学者を名乗ることもある。詳しくは廣田龍平「オカルトと民俗学その困難な関係性」ASTOS『昭和・平成オカルト研究読本』二〇一九 サイゾー

(9) 二〇二〇年三月二十二日に上げられた記事 山口敏太郎「妖怪アマビエの姿を見せると病気が治る」とはアマビエは一言も言っていない? 「不思議 net」(<http://world-fusion.net/archives/9590832.html> 二〇二〇年八月十五日閲覧)

(10) 山口敏太郎はアマビエが恨みを持っている理由を次のように語る。

「アマビエのベースになったアマヒコについて考察してみたと思う。アマヒコを漢字で表記すると「天日子」とか「海彦」となるが、いずれも「神の子供」という意味である。つまりアマヒコは神が零落して生まれた妖怪だといえる。となると推測されるのが民話の海幸山幸である。」として、以下のように続ける。長くなるが、省略が難しいのでそのまま記す。「山で獲物をとって暮らしている弟の山幸彦、海で魚を撮って暮らしている兄の海幸彦。ある日二人は自分たちの道具を交換し、海幸彦は山へ狩りに出かけ、山幸彦は海へ釣りに出かけた。しかしミスで兄から借りた釣り針を無くしてしまった山幸彦は、兄の怒りをとくために海の中へ釣り針を探

しに向かう。そこでサメの化身である豊玉姫と出会い、恋に落ちる。さらに豊玉姫の父である海神(ワタツミ)の信頼を勝ち取り、釣り針を返してもらった上に、塩の満ち引きを操る珠をもらうことに成功する。

その後、山幸彦は豊玉姫を連れて陸に帰り、兄の海幸彦を従える事になる。我々が子供の時に読んだ神話は、この頃までである。

子供への影響を考えてフアジーな表現にしていたようなのだが、オリジナルのストーリーは娘婿である山幸彦を応援するために海神は山幸彦の宿敵である海幸彦に呪いをかけたと言われている。つまり、海神の呪いにより海幸彦は零落し、妖怪となってしまうのだ。では、なぜアマビヒコやアマビエは三本の足とくちばしを持っているのだろうか。それは簡単である。弟の山幸彦と豊玉姫の間に生まれた子供の子供が神武天皇であり、神武天皇が東征する際に先達を務めたのが三本の足を持つ八咫鳥なのだ。

言い換えれば、弟の孫の先達を務めた八咫鳥と同じような姿に変えられてしまった結果、海幸彦は三本の足とくちばしという奇怪な姿になってしまったのだ。」記事の内容の是非は今回は問わない。

(11)「アマビエブームで見逃されたこと 民俗学者がつづる「物言う魚」の本質 ネット時代の「予言獣」の役割」(<https://news.yahoo.co.jp/articles/30a2d47ad9147ce2030f1d223bd5d91370f3e62?page=2> 二〇二〇年八月十五日閲覧)

(12)「新型コロナウイルス流行中の妖怪「アマビエ」の正体とは? 本気のアマビエ研究者がわかりやすく解説します!」【ふーぼこ

ラム】(<https://fupo.jp/article/amanabi/> 二〇二〇年十月三十日閲覧)

(13) 一休「続!あまびえちゃん」(<https://www.pixivnet/artworks/80004497> 二〇二〇年八月十五日閲覧) 同日、三月九日に同イラストは先にTwitterに投稿された。(<https://twitter.com/ikkyu019/status/12369372275249152?s=06>)

(14) 三遊亭白鳥チャンネル「白鳥チャンネル」凄く小さな女の子に会った実録不思議体験」(<https://www.youtube.com/watch?v=xQRmXGH4FM0> 二〇二〇年五月三十一日公開 二〇二〇年八月二日閲覧)

(15) 「三遊亭白鳥の湖」(<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~hakutyou3/> 二〇二〇年八月十五日閲覧)

(16) 木下浩「岡山の妖怪事典・妖怪編」二〇一四 日本教育出版に「輸入道【倉敷市】玉島警察署の前の道を輸入道が通過したのを見た」という話が載る。「輸入道」は鳥山石燕の描いた妖怪で、具体的に口承はされていない。現代では水木しげるの漫画などに登場するなど知名度はあるキャラクターである。

(17) 『日本俗信辞典 植物編』二〇二〇 KADOKAWA には「タケに花が咲くと国に一大事が起きる(秋田) 実がなるのは戦争の兆(千葉・宮崎)、花が咲くと世の中が悪い(青森)。」など竹の花の凶事が載っている。(ながしま・ひろき/公立中学校教員)

【緊急特集】 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究

コロナ禍伝承の可能性

—コトバ・フレーズ・ハナシの発生をめぐって—

米屋 陽一

はじめに

二〇二〇年四月七日、政府は「緊急事態宣言」を発出した。その日から日常は非日常になった。不要不急の外出自粛、三密(密閉・密集・密接)、マスクを着用しソーシャルディスタンス(社会的距離)を保つことが強調された。全国の学校は休校、企業・公共機関などは臨時休業状態に追い込まれた。

保育園、幼稚園、小学校・中学校・高校・大学、医療現場、地域、家庭…、乳幼児から高齢者に至るまで、新しい日常、新しい生活様式が求められている。新聞・週刊誌・月刊誌・ラジオ・テレビ・ネット・スマホなどからは、毎日のように新語・造語・カタカナ言葉・医療関連の専門用語などであふれており、難しい語彙は理解するまでに時間を要した。

このようなコロナ禍の状況下で、真偽不明のデマ・うわさ話が飛び交い、その解釈をめぐってハナシが発生してゆく。また、

予期せぬさまざまな事故・事件が勃発している。これらのコトバ・フレーズ・ハナシの数々を口承文芸学の立場から、(「目前の出来事」(現在の事実)(柳田國男『遠野物語』初版序文)として記録し、(このことを書きのこさねばならない)(原民喜「夏に花」と考えた次第である。筆者の元にさまざまな形で届いた資料や収集した資料を整理・記録し、「研究ノート」としてまとめてみた。

— コロナ禍状況下のハナシの発生1・チェインメール(チェインメッセージ)

新型コロナウイルスの感染拡大が中国・武漢で起こっている最中に、信頼しているある友人からLINEが送信されてきた。発信源はどこからか不明であったが、「友人の誰々の誰々…」と記してあったから、これはチェインメールかも知れないと思った。送信した友人は、事実だと信じ最新情報として仲間に発信